

・・・ 商業科の復活 廃止の危機を乗り越える ・・・

◆新学期の発足と存亡の危機

戦時中の非常措置により商業学校が事実上廃止になっていたため、終戦と共に商業科復活、戦前の商工学校復元の声が生徒・保護者・地域住民の間から高まり、県への陳情は2回に及んだ。その結果、機械科を転換して商業科の復活、同時に木材工芸科の復活が正式に認可された。

昭和21年4月からは、木工・建築・土木の3科に商業科を併合し、工業学校として出発することになった。商業科はこの復活に当たり、独立校舎を持つことになったが、新校舎獲得まで工業学校に併設された。22年12月に工業科は兵器廠を入手後、改造された新校舎へと移転した。この時が事実上本校の再出発の時と言えるかもしれない。

県教育委員会から出された高校学区制試案は、その後10地区に分けての新制高校の再編を10月末までに具体化するというものであった。県案では直江津・新井に各学区を定め、高田学区を縮小し、本校は女子高校（現高田北城高校）に併合され、男女共学制をとって並置高校の男子商業科とし、現商業高校の校舎は他に転用するか、高田盲学校を設置するかというものであった。

このような状況から独立存置運動が強力に展開され、関係者あがての心血を注ぐ努力によって存置が認められ、廃止の危機を突破することができた。

◆六華商事・六華銀行設立

本校では以前から商業教育の一環として、生徒による購買・銀行を運営してきたが、当時小中学校でさえ学用品を販売する購買部や子供銀行の名のもとに銀行を持つようになっていた。そこで、商業高校としてより高度なものが要求されることになり、従来の購買・銀行部を吸収し、経営を全て生徒に委ねる形で六華商事株式会社を創設した。

会社の設立・届け出・株式募集・利益配当等一連の会社業務を経験させるとともに、責任観念の養成、事務能力の涵養を図らんとするものであった。昭和26年、会社名を校歌に因んで六華商事株と決定した。発起人により定款が作成され、学校が公証人として書類を提出させ、認証した。第1期の株主配当金は一人30円（持株3）であった。

昭和29年4月1日、六華商事の一部であった金融業務が商事と同様の手続きを経て、分離独立して六華銀行となった。

この六華商事株は全国的にも注目を集め、過去2年にわたり運営研究してきたものを、29年6月本校で開かれた文部省・県教委主催の産業教育研究会で発表した。この研究会は「株式組織の会社を運営することによる商業実践方法の研究」を主題としており、関東東北諸県から百余名が参加した。本校はこの種の学校会社の先導的役割を果たしたのだった。



昭和21年 復活した全校妙高登山（赤倉温泉にて）



昭和27年 図書室



昭和29年 授業風景